

経済・金融 フラッシュ

10月に続き0.2%利下げを実施： 長期国債買入増額、CP買取実施も決定

経済調査部門 主任研究員 矢嶋 康次

TEL:03-3512-1837 E-mail: yyajima@nli-research.co.jp

1. 10月に続き0.2%の利下げを実施：

日銀は現在の景気を2002年5月以来の「悪化」と判断した。その上で「中央銀行としてなし得る最大限の貢献を行う」とし、10月に続き0.2%の利下げを実施、さらには長期国債の買入増額、CP買取実施を決定した。

景気が急激に悪くなっている上、足もとは円高が進んでいる。日銀の判断として今、手を打たないと景気後退が深くなり、取り返しがつかなくなるとの考えから、強力なサポートを打ち出してきた。

またFRBの予想よりも早い量的金融緩和採用も日銀の政策を後押しした。

2. どうしても比較してしまう評価軸「対FRB」：為替の円高圧力、介入

各国金融政策が悩んでいるように、追加緩和そのもので大きく経済状況が改善するといった「刺激効果」は限定的である。ただし、効果が限られているとしても、日銀もきっちり対応するという「スタンス」を示すことが重要なはず。その点、足元起こっている円高、厳しい企業金融、高止まりする短期市場金利に対して「手を打つ」というメッセージを出してきた。

ただし、対FRBで見てどうしても「引いている」という印象は残り、為替面で「円高」は注視しておかざるをえないだろう。

既に市場では日銀の「次の一手」に移っている。その点ではFRB対比で見て、量的金融緩和にまだ一步引いているという印象をどうしても受けてしまう。FRBが量的金融緩和に突入したのになぜ躊躇する必要があるのかとの批判は当然でてくるだろう。

また円高が加速した場合、もう一段の金融面での政策がありえるのではと見られ、「介入」に対する各国の理解は得られにくいという問題が残った。

筆者はそうはいつでも円高が進行した場合、介入してくると予想しているが、この先円高が進んだ場合、介入ではなく、まずは金融緩和だろうとの声はでてくる。

3. 今後の金融政策の焦点：円高、資金繰り、景気浮揚

日銀の金融緩和がこれで終わりということはずがない。早晩量的金融緩和に突入（過去の当座預金残高をターゲットとするような政策ではなく、FRBと同じようなスタイルで量的金融緩和を宣言し、バランスシートの拡大を今後の政策として発表）し、その中でいくつかの問題別に対応が求められることになりそうだ。

これから予想される問題は円高、年度末に向けた資金繰り、景気浮揚である。円高には、マネタリーをどのように拡大するかが重要で、さらなる国債買切増額といったマネタリーベースの拡大を図ってくるだろう。

資金繰りや景気浮揚という点では、クレジットクランチの緩和が大きな焦点となり、バランスシートの拡大とともに、リスクを日銀がとるといふ政策が必要になってくると思われる。CP買い入れの拡大などや過去行った銀行保有の株式購入などの政策が実施されると見るが、今回公表分の中でもあるように「将来の資産の痛み」に対する議論がネックになりそうだ。

昔も負担議論だけが大きくなり、市場は日銀・政府ともに消極的だと冷めてしまった。大胆な政策と市場が評価するためにも負担問題は早めに対応するといった流れになることを期待したい。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。